

第2章 史跡「宗像神社境内」周辺の現状

1. 宗像市の環境

(1) 自然的環境

①位置、地勢、植生等

宗像市は、福岡県の北部に位置し、沖合には大島、地島、勝島そして沖ノ島などの離島がある。市域面積は11,991haであり、うち離島面積は1,001haである。

北は玄界灘に開け、その他は標高200～400m前後の山々や丘陵に囲まれた盆地の形成を成し、市中心を釣川が貫流している。離島は、沿岸部からすぐに険しい斜面が続き、平地に乏しい地形である。

植生の分布は、海岸は自然裸地の砂浜であり、その背後はクロマツ植林（さつき松原）となっている。釣川とその支流沿いはほぼ田園が占めている。



図2-1-1 宗像市の位置

②気象

宗像市の平均降水量（昭和 55（1980）年～平成 22（2010）年）は 1640.0 mm であるが、昭和 51（1976）年から始まる統計を見ると、年間降水量は昭和 55（1980）年に観測した 2676 mm が最大で、平成 6（1994）年に記録した 1039 mm が最小である。このように 1 年間の雨量は年によって 1000 mm 以上の開きがある。1 年間の季節ごとの降水量は昭和 55（1980）年～平成 22（2010）年までの平均値をみると、冬場をまたぐ 11 月から 2 月にかけては月 100 mm 以下と低めに推移するが、梅雨時期にあたる 6 月は 252.9 mm、7 月は 277.1 mm と多い。近年は 9 月に降水量が増加している傾向が認められる。

宗像市の平均気温（昭和 55（1980）年～平成 22（2010）年）は 15.6 度である。夏場の最高気温は 8 月に記録され最高平均気温 31.0 度、最低平均気温 23.2 度、平均気温 26.7 度である。冬場の最低気温は、1 月が最も寒く最高平均気温 9.7 度、最低平均気温 1.3 度、平均気温 5.5 度である。昭和 52（1977）年から始まる統計を見ると最高気温は平成 22（2010）年 8 月 21 日 14 時 19 分に 37.2 度を記録し、最低気温は昭和 55（1980）年 2 月 17 日 6 時 00 分に -6.6 度を記録している。

宗像市の月平均風速は、年間を通じて 2 から 2.5 (m/s) を記録している。昭和 52（1977）年からの統計で最大風速は、平成 17（2005）年 9 月 6 日 15 時 10 分（台風 14 号）と平成 18（2006）年 9 月 17 日 19 時 20 分（台風 13 号）の 17 (m/s) を 2 回観測されている。また、平成 21（2009）年から統計が開始された最大瞬間風速は、平成 27（2015）年 8 月 25 日 6 時 55 分（台風 15 号）に観測された 29.3 m である。いずれも台風の吹き返しによって観測されたデータである。このほかにも記録に残る強風は観測されていないが、12 月から 3 月にかけての冬場に北東や北北東から強風が観測される。これは低気圧が通過し気圧配置が西高東低の冬型になった日に大陸から季節風が吹き込むことで、大島渡船がしばしば欠航する。

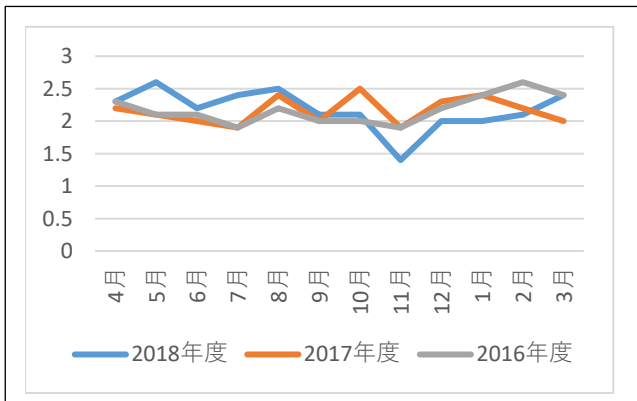


図 2-1-2 月合計降水量 (mm)

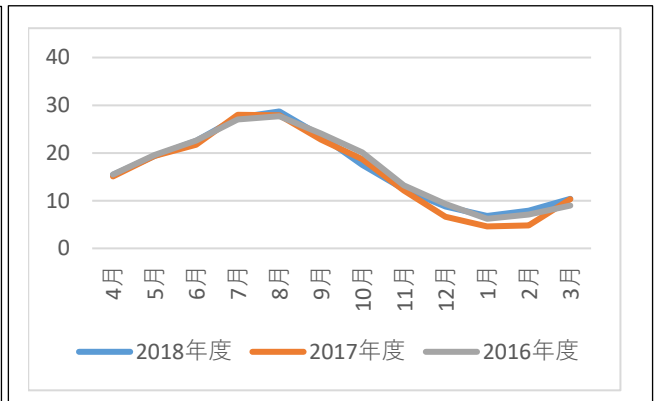


図 2-1-3 月平均気温 (°C)

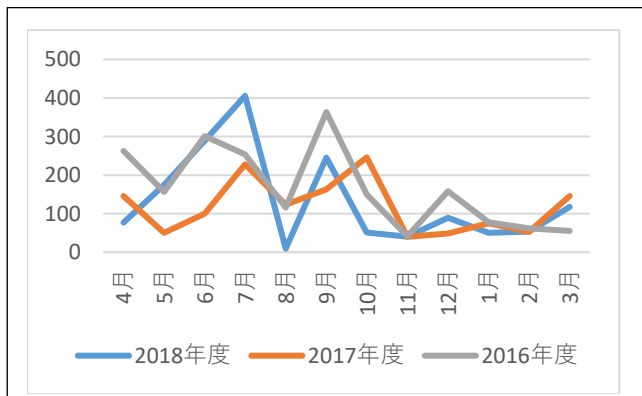


図 2-1-4 4月平均風速 (m/s)

③災害

(i) 宗像神社境内における過去の災害

『宗像神社史附巻』(年表)によると、これまで宗像神社境内においては、台風、大風による鳥居など石造物の転倒、建物被害、倒木による建物被害および洪水による浸水被害がみられる。

地震については、次表のものが関係していると考えられ、宗像の震度は5~6(過去のものは推定)程度である。玄界灘で津波があったと考えられる地震は多くない。

表 2-1-1 宗像神社境内における災害年表

年号 西暦	事 項	出典
慶長 4 (1599) 年	8月 辺津宮正面の木鳥居、大風にて転倒す。	神社史
元和 7 (1621) 年	5月 夜、第一宮本殿の瓦悉く落つ。	〃
慶安 2 (1649) 年	8月 辺津宮正面木鳥居、大風のため破損す。	〃
萬治 3 (1660) 年	9月 辺津宮阿弥陀經石覆屋に覆ひかかれる楠の巨木、大風により倒れ、覆屋を砕き、經石を二つに分断す。	〃
元禄 16 (1703) 年	2月 これより先、辺津宮社頭の木鳥居破損す。	〃
宝永元 (1704) 年	8月 大風洪水、昨年二月、藩主綱政建立の石鳥居転倒す。	〃
享保 9 (1724) 年	8月 大風のため、辺津宮末社並に拝殿に大杉倒れ、破損す。	〃
宝暦 5 (1755) 年	大風吹く、宗像・鞍手・遠賀・上座・下座・夜須・御笠・嘉麻・穂波被害甚大、潰家 2,830 戸、死者 43 人、斃牛 19 頭、倒木 15,000 本。	地域防災
宝暦 12 (1762) 年	3月 辺津宮末社政所社、倒木により潰損す。	神社史
文政 10 (1827) 年	正月 辺津宮本殿・拝殿・末社屋根大破につき、修復方を藩庁に出願す。但し儉約令により許されず。	〃
文政 11 (1828) 年	台風、曲村・名残村では家屋崩壊、倒木、死者あり。希代の台風で大被害、転家・転木著し。「希代の台風」、多くの家屋が崩壊。	地域防災
天保 11 (1840) 年	古今曾有の洪水、郡中で 20 箇所余り土手切れ。	〃
嘉永 3 (1850) 年	宗像地方に大洪水、大暴風雨、宗像地方困窮し救援米 8,420 包を受ける。	〃
明治 17 (1884) 年	8月 沖津宮遙拝所、その神饌所・奉幣使控所・大石燈籠・透塀等、暴風により転倒す。	〃
明治 24 (1891) 年	この年 辺津宮新馬場石鳥居、水害にて転倒す。	〃
明治 26 (1893) 年	未曾有の大雨洪水、村民困窮、暴風烈雨、家屋倒壊、草木枯死すると過去帳にある。	〃
大正 7 (1918) 年	同上。	〃
昭和 5 (1930) 年	7月 暴風雨により、宗像三宮の施設・樹木に若干の被害あり。	神社史
昭和 16 (1941) 年	10月 暴風雨のため社殿および植樹に被害あり。	〃
昭和 17 (1942) 年	8月 台風のため、中津宮施設の一部に被害あり。	〃
昭和 18 (1943) 年	9月 強風のため、沖津宮社務所の屋根破損す。	〃
昭和 21 (1946) 年	8月 密漁船員、沖ノ島に上陸し、喫煙せるため火薬に引火し、沖津宮社務所等三棟全焼す。	〃
昭和 28 (1953) 年	2月 辺津宮本殿の防災工事に着手す。3月完了す。	〃
昭和 34 (1959) 年	7月 豪雨により辺津宮玉垣・拝殿・社務所床下浸水し、高宮参道附近の崖崩壊す。	〃
昭和 41 (1966) 年	この年 辺津宮本殿・拝殿・境内摂末社・神饌所・斎館・土蔵等の諸施設、白蟻による被害のため、業者に駆除作業を依頼し、六月駆除を行ふ。	〃
昭和 45 (1970) 年	8月 台風のため、辺津宮施設に若干の被害あり。	〃
昭和 47 (1972) 年	7月 豪雨により沖ノ島の社務所、正三位社が流される。その後、港湾背後の法面は平成 2 (1990) 年モルタルで補強される。	現状変更一覽
平成 18 (2006) 年	7月 大雨により、沖ノ島襖ぎ場の背面の崖が崩壊し、その後、網による防護柵で補強される。	〃
平成 26 (2014) 年	8月 豪雨により沖ノ島の「おたか」登り口が崩壊	〃
平成 26 (2014) 年	10月 台風による大島の沖津宮遙拝所の屋根損壊	〃

資料：宗像神社史附巻(年表)、宗像市地域防災計画、現状変更手続き一覽

(ii) 宗像市周辺の地震発生予想

北部九州の活断層としては、下図のものがあるが、辺津宮境内に近接する宗像市と福津市の境界線上に「西山断層系」が走っている。西山断層系は活断層とされているが、差し迫った地震の発生の可能性は小さいとしている。しかし、最新の新聞報道によると、今後 30 年以内にM6.8 以上の地震が起こる確率は、九州北部では 7～13%、西山断層系はM7.9～8.2 が予想されている。(政府地震調査研究推進本部発表。平成 25 (2013) 年 2 月 1 日)

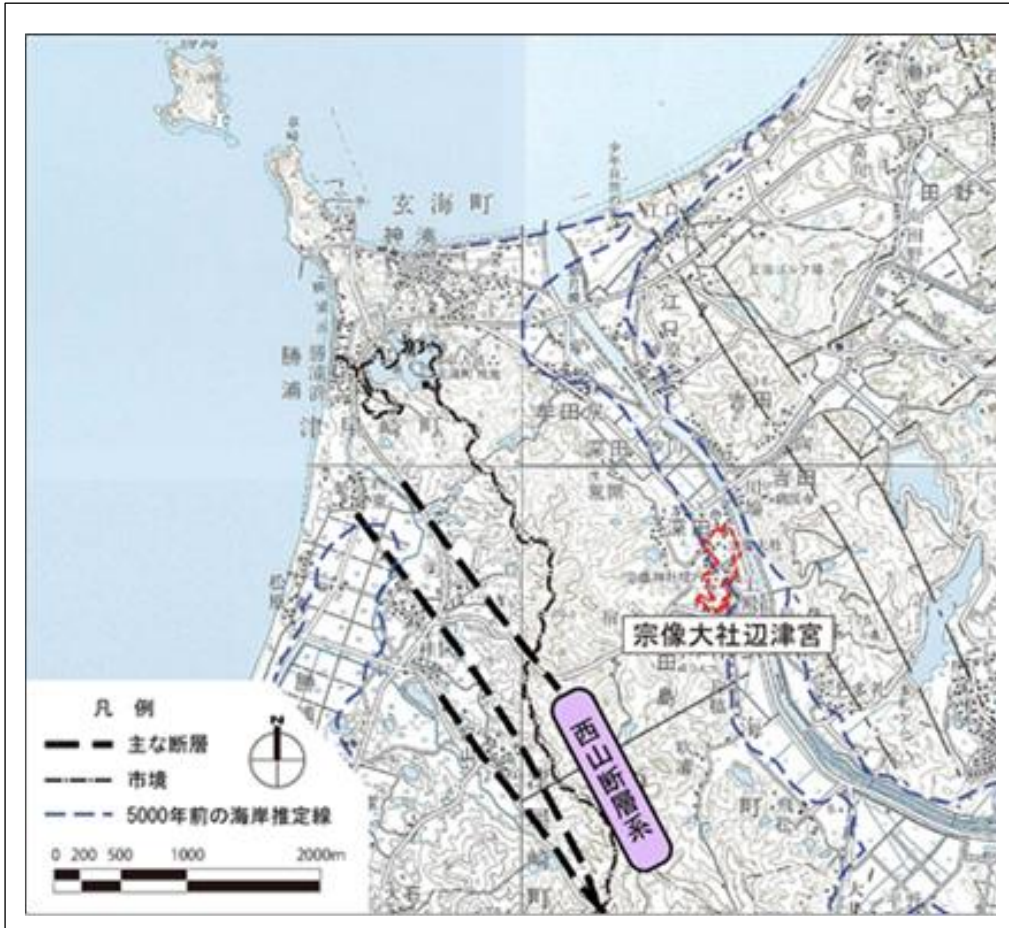


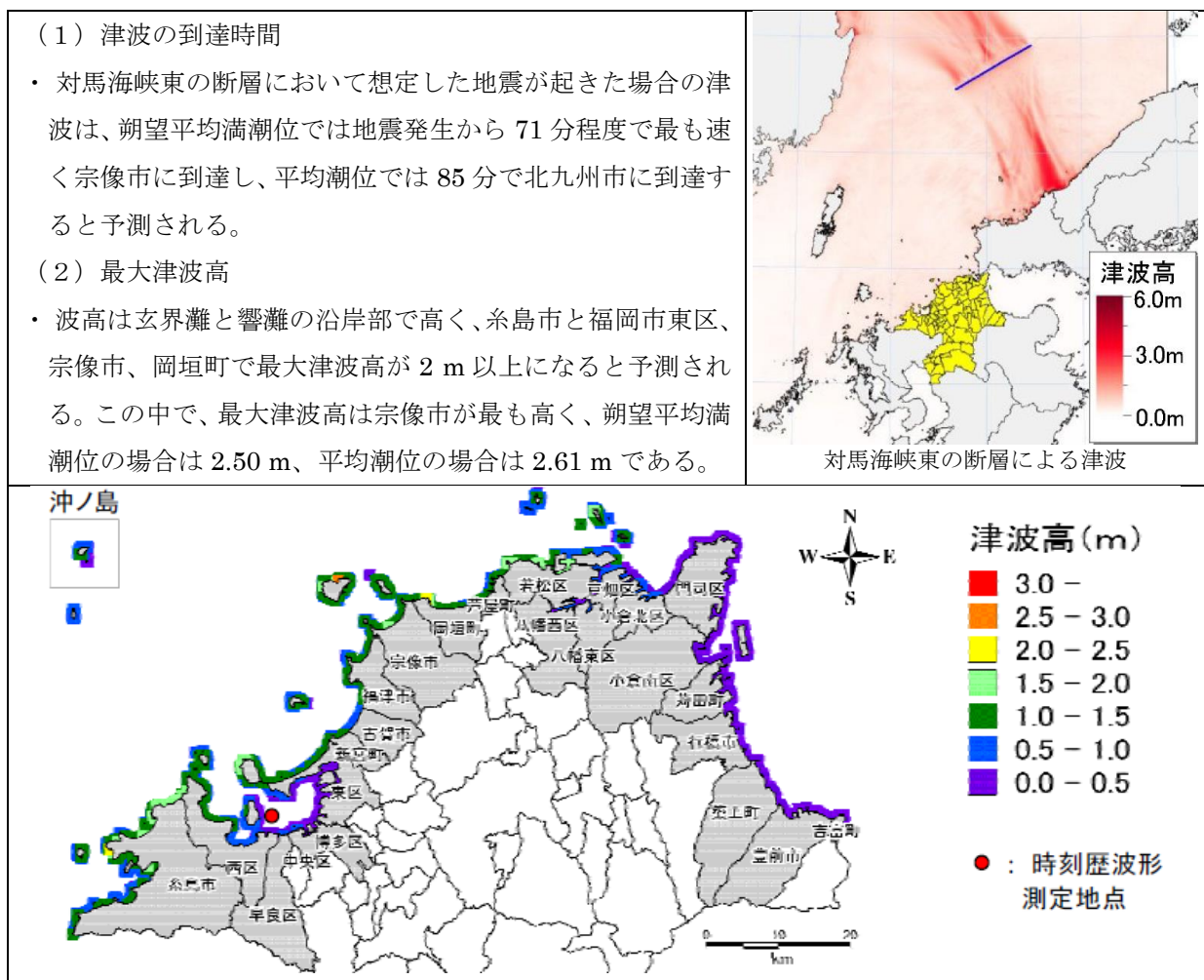
図 2-1-5 西山断層系と宗像大社辺津宮の位置関係

(iii) 津波の発生予想

平成 23 (2011) 年 3 月 11 日に発生した東日本大震災をうけて、福岡県は災害対策基本法に基づいて福岡県防災会議が定めた地域防災計画（震災対策）の見直しに着手し、福岡県においても最大クラスの津波を設定し、詳細な検討を行う必要があるとの考え方から「津波に関する防災アセスメント調査」を行っている。

同調査報告書では、対馬海峡東の断層、周防灘断層群主部、雲仙地溝南縁 東部断層帯と西部断層帯の運動の 3 つの波源による津波の高さを推計しているが、宗像市を含む玄界灘、響灘沿岸地域においては、対馬海峡東の断層による津波の影響が大きいと予測され、推計計算結果を次のように示している。

宗像市では最大津波高が 2 m 以上になると予測されており、下表のように、大島の沖津宮遙拝所の付近では 2.5～3 m になると示されている。また、津波が釣川を遡上し、辺津宮付近まで達するものと考えられている。



資料：「津波に関する防災アセスメント調査報告書」平成 24 (2012) 年 3 月

図 2-1-6 対馬海峡東の断層による津波の予想

(2) 社会的環境

①沿革

明治 22 (1889) 年の市町村制施行により、当地方は 12 村に再編成され、大正 14 (1925) 年までに 3 町 8 村となった。その後、昭和 29 (1954) 年に内陸部に位置する 2 町 4 村の合併により宗像町が、同 30 (1955) 年に沿岸部の 1 町 3 村の合併により玄海町が誕生した。昭和 56 (1981) 年には宗像町が旧宗像市となり、平成 15 (2003) 年に旧宗像市と玄海町が合併し、平成 17 (2005) 年に大島村が宗像市に編入され、現在に至っている。

②産業

農業では、釣川流域に広がる田園地帯における稲作をはじめ、麦・大豆を中心にした土地利用型農業や、これに野菜や果樹等を組み合わせた複合型農業、イチゴやトマトなどの施設園芸等が盛んであり、多様な農産物が生産されている。

漁業では、沿岸部で古くから盛んな地域として、神湊、鐘崎、大島、地島と福津市の福間、津屋崎及び勝浦の 7 漁村は「宗像七浦」と総称されていた。主要な海産物にはブランド化されているトラフグやアジをはじめ、ワカメやメカブ、アカモク等の海藻類もある。

観光面をみると、宗像大社、鎮国寺及び宗生寺などの社寺や、旧唐津街道沿いの赤間宿、原町のまちなみなど貴重な歴史文化資産を有しており、特に宗像大社は、本市の歴史・文化のシンボルであるとともに、重要な観光資源でもある。

(3) 歴史的環境

①原始

宗像地域における人の生活の起源は、発掘された遺跡などから約 3 万年前から 1 万年前の後期旧石器時代と考えられており、市内の遺跡等でナイフ形石器や台形石器が発見されている。

縄文時代に入ると、氷河期の終焉とともに海面が上昇したため、海が釣川沿いに内陸部まで入り込んだとされ、縄文時代前期 (4700 年前) の海岸線が推定されている (図 2-1-8)。また、入海周辺の平野部が居住地として活用されていたと考えられているが、釣川中流域では縄文時代の遺構は発見されていない。

縄文時代後期の遺跡としては、鐘崎貝塚が挙げられる。昭和 8 (1933) 年頃から貝塚として認識され、海水産・淡水産の貝類、魚骨及び獣骨などが出土し、海や山に生きる縄文人の暮らしぶりをうかがい知ることができる。

弥生時代には、気候の変化とともに海岸線が後退し、内陸部に平野が形成された。また、同時期に稲作技術が伝来し、釣川中流の丘陵や河成段丘上に集落が形成されている。

前期初頭の東郷登り立遺跡では、環濠集落の成立がみられる。また、田久松ヶ浦遺跡では、朝鮮半島に起源を有する石槨墓も確認され、朝鮮半島との密接な交流が推察される。

古墳時代には、宗像氏がヤマト王権 (大和朝廷) と結びつき、大きく成長した時期である。4 世紀後半から沖ノ島で航海の安全や国家安寧を願う国家的祭祀が始まったとされ、優れた航海技術を持つ宗像海人族を束ねていた宗像氏がヤマト王権 (大和朝廷) の国家的祭祀に深く関わっていた。

沖ノ島での国家的祭祀を担った人々の墓は、釣川流域に多数存在し、これまで前方後円墳 22 基、円墳約 2,000 基、横穴墓約 200 基が確認されている。また、宗像地域に見られる古墳の石室構造は、極端に深い墓抗と天井の高い玄室、石材を平積みにする玄門に特徴があり、宗像型石室と呼ばれ知られている。

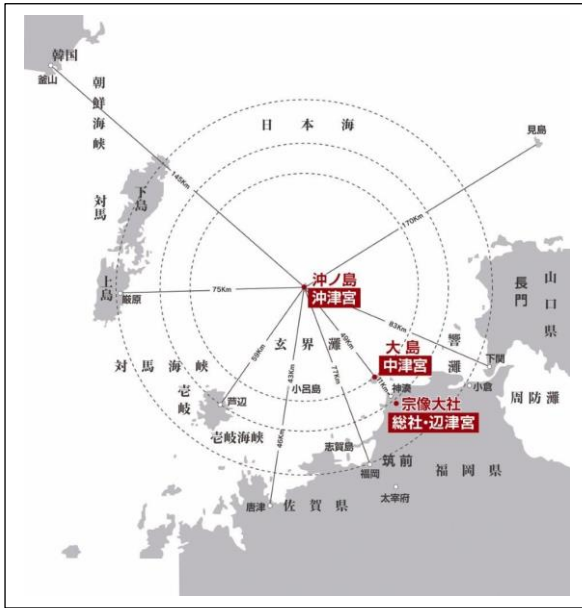


図 2 - 1 - 7 広域的位置図

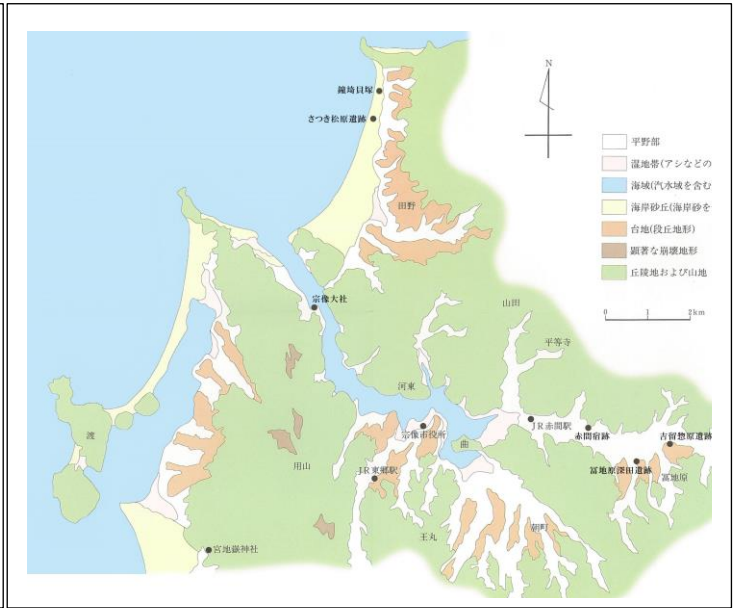


図 2 - 1 - 8 縄文時代の宗像の地勢

②古代

一地方豪族から発生した宗像氏は、古墳時代のヤマト王権（大和朝廷）とつながりをもったことをきっかけに、中央政権との関係を強固なものにしていく。

中央政権の律令制下において、宗像郡内でも条里制が施行され、郡内には十四郷があったとされ、うち七郷が現在の市内になったと推定されている。

宗像氏が支配した宗像郡は7世紀中頃あたりから、「神郡」として認められるようになると、宗像大社の神域とされ、様々な特権が与えられた。宗像氏は、郡司とともに宗像大社の神主を兼務し、宗像郡の行政権と宗像大社の祭祀権を一手に握り、強力な地域支配を行っていく。

③中世

宗像大宮司家による支配は、天延 2 (974) 年に大宮司職が設置された後、鎌倉時代、室町時代を経て、戦国時代、天正 14 (1586) 年に宗像氏貞が没するまで続くことになる。

大宮司家による海の支配は、浦や島に沙汰人を置く直轄管理で行われていた。日宋貿易の拠点は小呂島の他、「唐防」の地名が残り多量の輸入陶磁器が出土した西ノ後遺跡のある津屋崎漁港周辺と考えられている。

南北朝の動乱期、大宮司家においても内紛が続いた。その一方、宗像の地では、宗像大社邊津宮を中心に、盛大な祭礼が行われていた。史料には、正平 23 (1368) 年、一年間の宗像宮年中行事が 5,921 度とある。一年間の宗像大社関係の祭礼は、膨大な数であったことがうかがえる。

戦国時代に入り、九州は大友、島津、龍造寺三氏が互いに対立する状態になるが、次第に島津氏の勢力が圧倒的な強さを持つようになる。このような状況のなかで、宗像氏貞は城を築き領地を守り固めるとともに、領内神社の創建や修理にも努め、天正 6 (1578) 年には宗像大社の邊津宮本殿を再建した。

天正 15 (1587) 年に九州平定を成し遂げた秀吉は、宗像氏に対して、一定規模の社領を認めただけで、大宮司家の家臣団組織や領地の支配を認めなかったことにより、宗像氏の領主支配は終焉を迎えた。

④近世（江戸時代）

九州平定後、秀吉の命により小早川隆景が筑前に入国、文禄4（1595）年に跡を継いだ養嗣子の小早川秀秋が名島城に入城すると、宗像郡は隆景の隠居領となった。隆景は、天正18（1590）年に宗像大社辺津宮の拝殿を寄進している。

関ヶ原の合戦後は、慶長5（1600）年の黒田長政筑前入国以降、宗像郡は福岡藩の体制下に組み込まれ、長政の父、黒田如水が宗像郡に隠居領を持ち、その後は近代に至るまで、農村・漁村としての性格が強まっていく。

漁村部では、福岡藩が城下町以外を郡方・浦方に区分し、浦奉行が支配する浦方では、漁業や海運業、またはそれらに伴う商業が生業として営まれた。神湊、鐘崎、大島、地島及び津屋崎の各浦は「宗像七浦」に数えられた。鐘崎は日本海沿岸における海女発祥の地とも伝えられている。農村や漁村に対して、商いとしての賑わいを見せたのが唐津街道沿いの赤間宿である。赤間宿は唐津街道と赤間往還（木屋瀬で長崎街道に接続するもの）の分岐点に位置する。

⑤近・現代（明治時代以降）

昭和36（1961）年に国鉄鹿児島本線が電化されたのと時を同じくし、当時の宗像町は、福岡・北九州両市への通勤圏として注目された。県の協力のもとまとめられた都市計画案は、誘致が進んでいた森林都市団地、住宅公団団地及び福岡学芸大学統合地の3つの大規模事業を中心にまちづくり構想を練ったものであった。

福岡・北九州両市との位置関係からベッドタウンとして発展する一方で、東海大学福岡校の開校、福岡教育大学の転入、日本赤十字国際看護大学などの開校に伴い、学園都市としての基盤も整っていた。

近年では、宗像市・福津市・福岡県の三者連携により、沖ノ島をはじめとする国史跡「宗像神社境内」や福津市の国史跡「新原・奴山古墳群」を核とした世界遺産登録に向けた取り組みを進めるため、平成18（2006）年に「宗像・沖ノ島と関連遺産群」の世界遺産登録に向けた担当部署が設置された。その後平成29（2017）年に『神宿る島』宗像・沖ノ島と関連遺産群として世界文化遺産の登録に至っている。

2. 計画対象地の現状

(1) 計画対象地

計画対象地は、史跡指定地を基本とし、必要に応じて史跡指定地と一体となった近接地を含む。

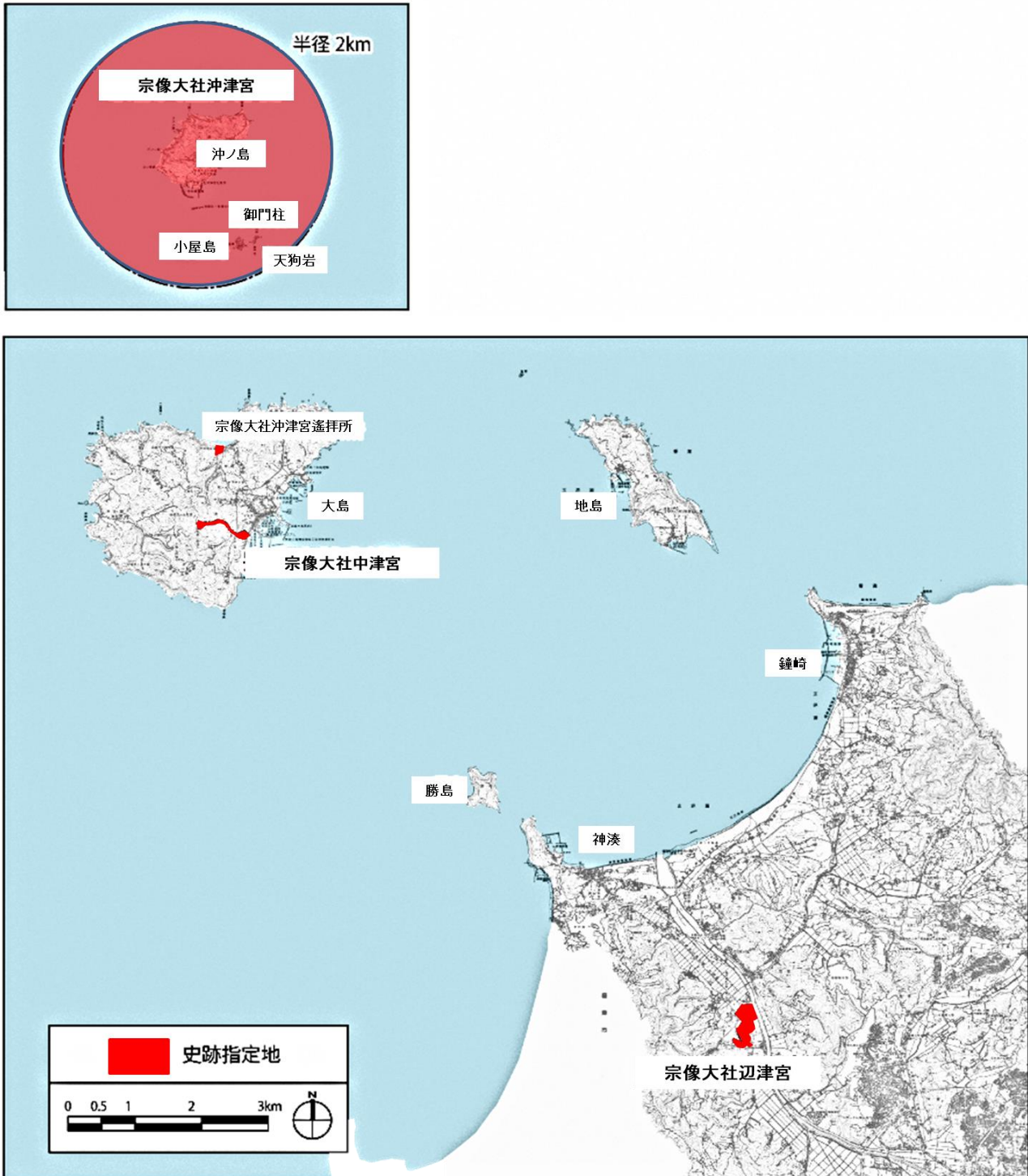


図 2-2-1 史跡指定地の位置

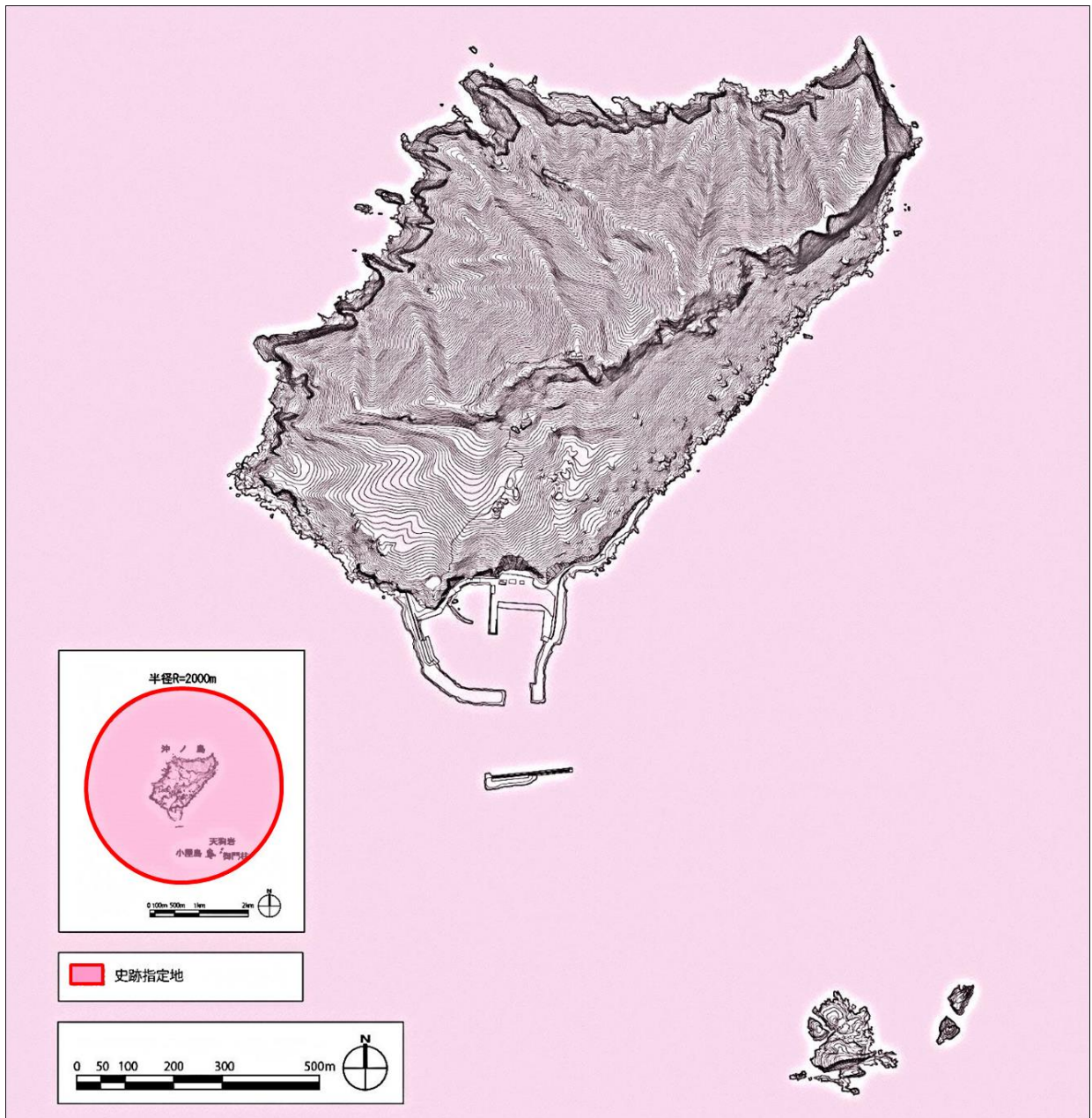


図 2-2-2 沖津宮の史跡指定地

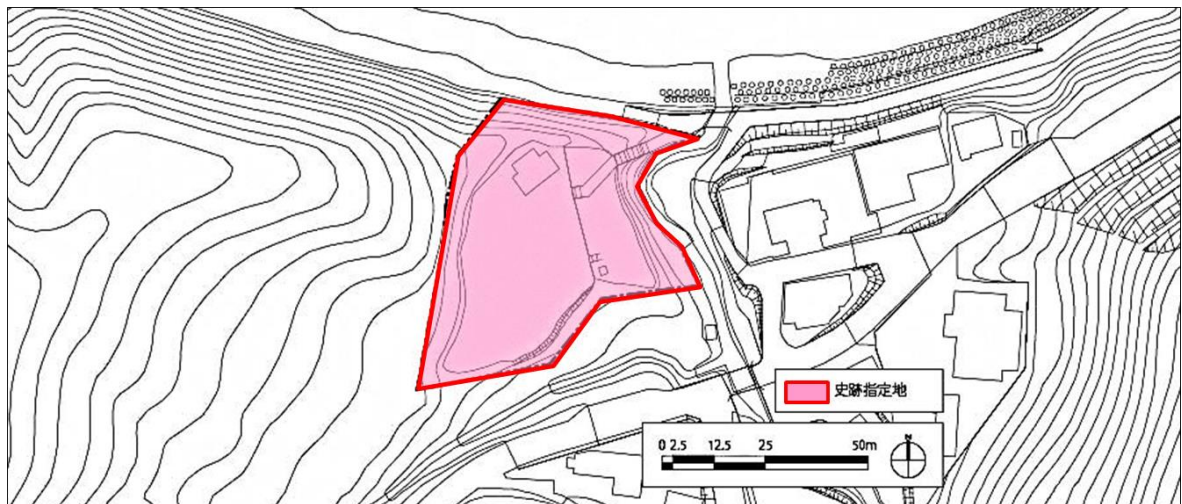


図 2-2-3 沖津宮遙拝所の史跡指定地

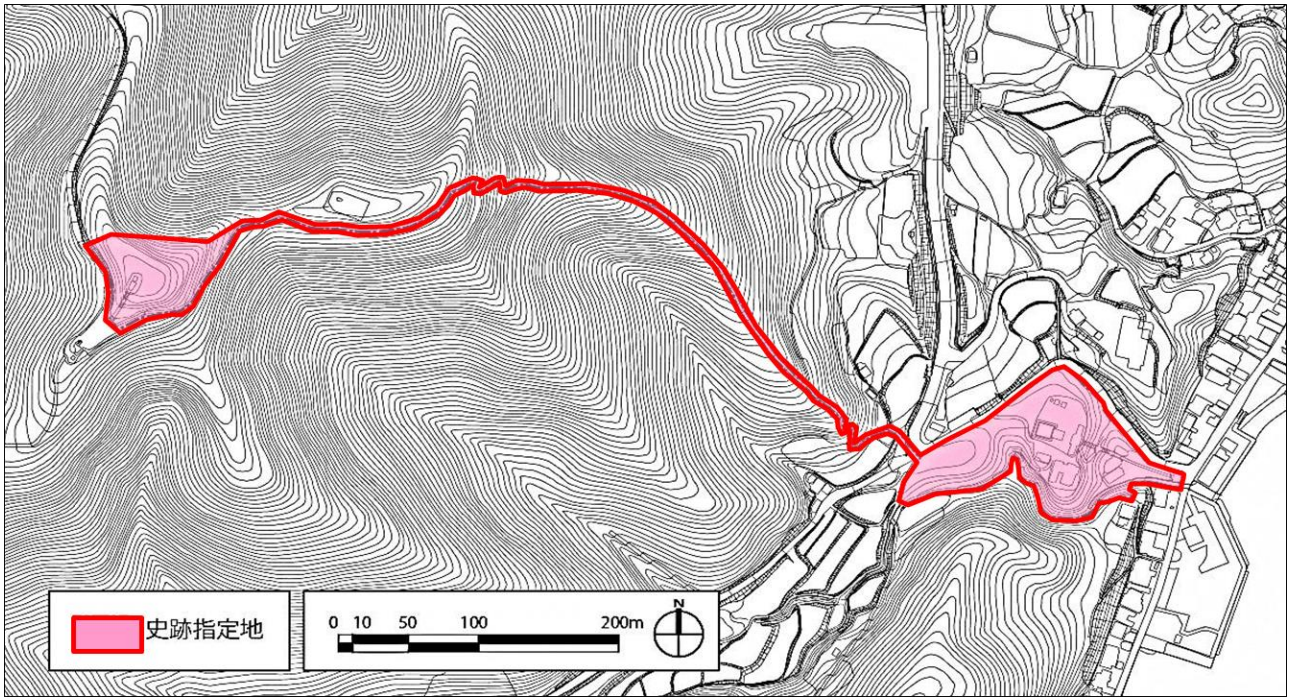


図 2-2-4 中津宮の史跡指定地

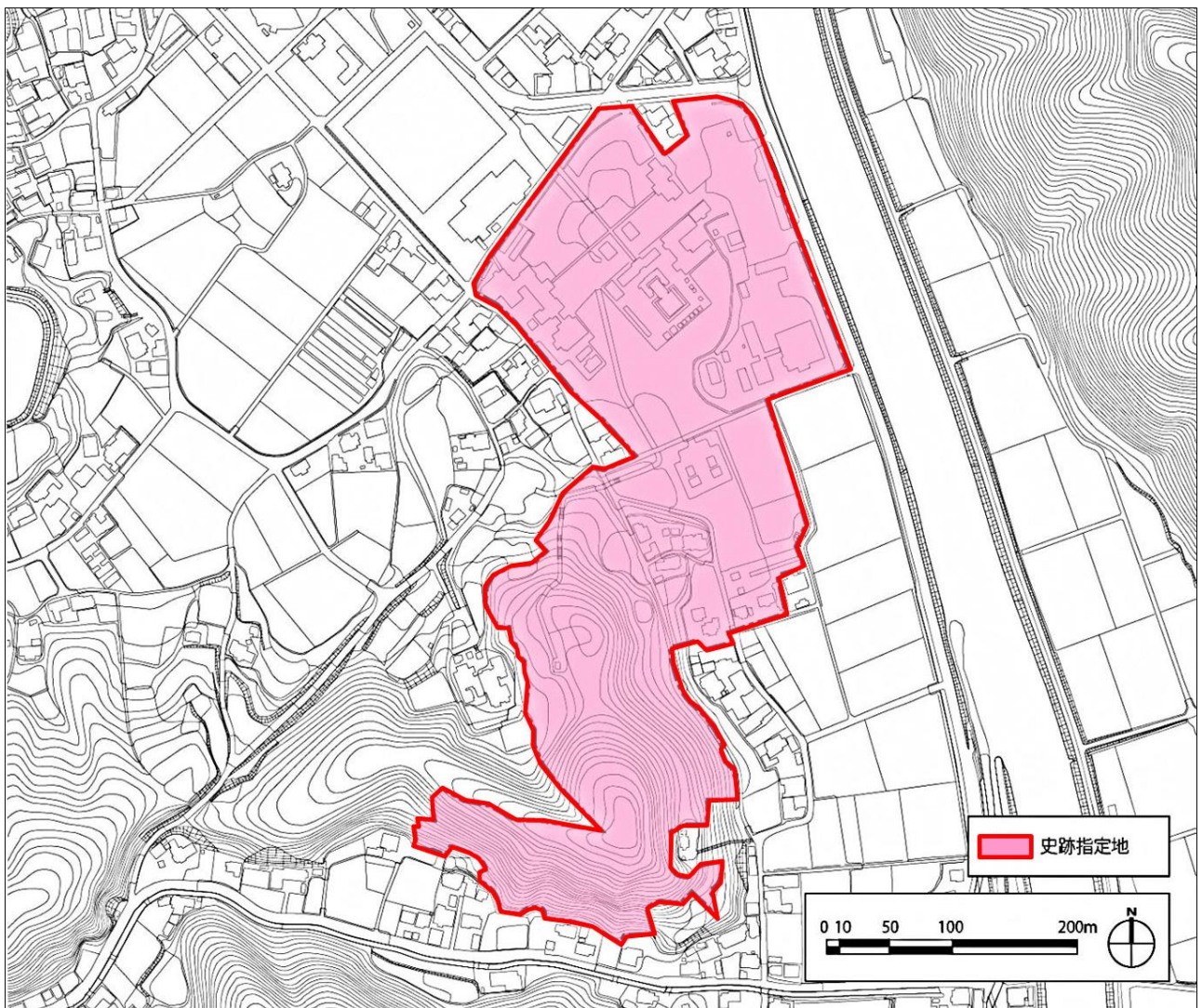


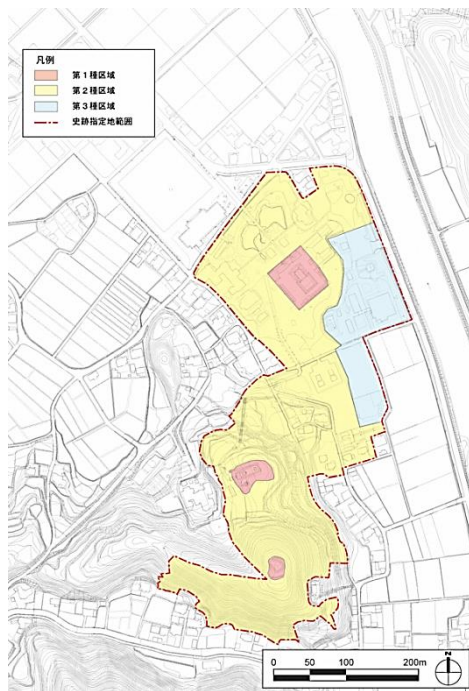
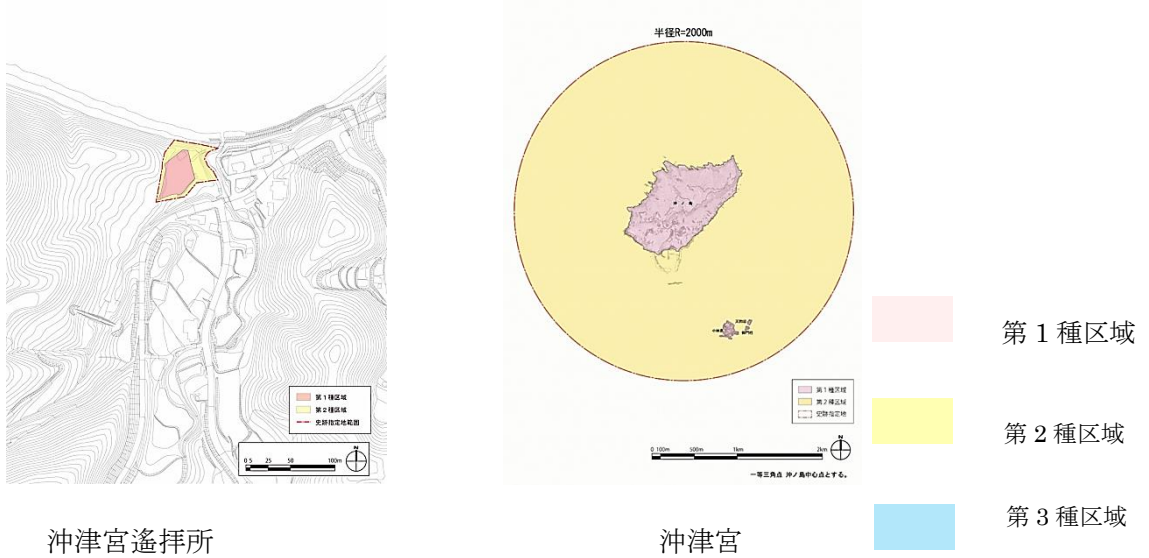
図 2-2-5 辺津宮の史跡指定地

(2) 保存活用計画による区域区分

第1種区域は、古代の祭祀遺跡や本殿・拝殿を含む範囲であり、本質的な価値の保存を優先して整備する。

第2種区域は、第1種区域に準じる範囲であり、社叢を含め信仰を支える構造物等の保存を優先し、来訪者の動線に配慮しつつ静謐かつ尊厳のある信仰の場を演出する。沖津宮は、すべて海域であることから、静謐かつ尊厳のある信仰の場に相応しい史跡景観を阻害するものは撤去する。

第3種区域は、辺津宮の第2駐車場や第3駐車場、神宝館が含まれるが、将来的には史跡の本質的価値を補強する整備を行う。



沖津宮



中津宮

図2-2-6 史跡境内地範囲図